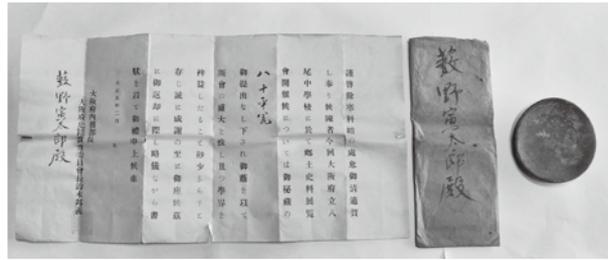


西田 孝司(松原市文化財保護審議会)



▲竹内街道に建つ「緑の一里塚」(立部5丁目)



▲「八十平瓮」として出展された瓦器小皿と藪野寅太郎宛の書状(藪野圭市氏蔵)



▲江戸時代建築を残す藪野家(手前)と土師家(奥)(立部1丁目)

反正天皇の嫂部(多治部)から江戸時代の名産かわらけ製造

十世紀初頭にまとめられた『倭名類聚抄』という書物に、河内国丹比郡や志紀郡などに土師里とよぶ地域があると記されています。丹比郡土師里が本市の三宅や立部、志紀郡土師里が藤井寺市土師ノ里や道明寺の地にあたると推察されています。古代、同地に土師氏が居住していたので、地名となったと考えられるのです。

土師氏は四〜五世紀の古墳時代以降、天皇陵などの築造や、素焼きの土器の土師器の製造に関わった豪族です。三宅では土師ヶ塚古墳などが伝わっていますが(『歴史ウォーク』299)、立部でも立部古墳群が検出されています。

立部三丁目の大塚運動広場の造成で埋没していましたが、五世紀後半の一基の方墳と、五世紀末〜六世紀前半の一基の円墳や、五基の方墳が検出されています。円墳は径十二m、方墳は五〜十m前後と小規模です。六世紀半ばの巨大前方後円墳で、天皇陵クラスの内大塚山古墳と至近の距離であることから、陵墓づくりを行った土師氏の墓域の可能性も否定できません。

立部は「たつべ」と読み、江戸時代の丹北郡立部村ですが、古代では「たちべ」とも「多治部」とも言われています。『古事記』によると、五世紀前半の仁徳天皇の時代、天皇が皇子であった

水歯別命(のちの反正天皇)に名代(天皇・皇后・皇子の名を付けた私有の部民)として、「嫂部」を与えたとあります。彼ら嫂部は、集団で村を形成しました。そして、上田の柴籬神社に伝承される丹比柴籬宮で即位した反正天皇に献上するため、宮近くで土器づくりに従事したと伝わっています。

のち、嫂部の表記から多治部へと変わったと言います。多治井(堺市美原区)や丹比(羽曳野市)の地名も周辺に残っています。一方、江戸時代、立部村は土師里や土師氏の伝承からか、土師村とも称し、今も土師姓の家が多く残っています。

江戸時代に入ると、立部では農業のかたわら製品として、土器を焼いていた農家が見られるようになりました。土師家に残る宝永二年(一七〇五)の『立部村明細帳』に「当村にて、かわらけを仕かまする百姓もいる」と書かれています。かわらけとは、粘土を材料として、釉をかけずに焼いた素焼きの土器を指します。

享保二十年(一七三五)に刊行された地誌の『河内志』にも、河内国丹北郡の「製造」として、「立部村で土器を造っている」とあります。立部村の「土器」が「カハラケ」として、丹北郡の代表的な製造品として名産となっているのです。

今の立部公民館の北側(立部二丁目)や、阿湯戸池(立部四丁目)西側などに粘土取り場があったと伝わっています。

ただ、立部の土器づくりも江戸時代末ごろにあまり見られなくなったようです。藪野家蔵の天保十四年(一八四三)の『立部村明細帳』では、土器を焼いている農家については触れられていません。また、明治七年(一八七四)の立部村の『吉村限調帳』にも、立部村では農業以外では、木綿稼ぎが盛んでしたが、土器製造は記されていません。

明治十年(一八七七)二月十五日、阿湯戸池西方で、鎌倉〜室町時代頃の瓦器小皿が発見されました。江戸時代、立部村の庄屋であった藪野家の田地から出土したのです。現在、同家に保管されており、土器裏に当時の当主、藪野又治郎が出土の様子を朱書で記録しています。

この土器は、大正五年(一九一六)二月、又治郎を継いだ寅太郎の時、大阪府立八尾中学校(現八尾高校)で開催された「郷土資料展覧会」で、「八十平瓮」の品名で展示されました。寅太郎に宛てた大阪府内務部長兼大阪府史蹟調査委員会長の鈴木邦義の書状も残っています。「八十平瓮」とは、浅くて平らな土器の皿である「平瓮」に、数の多いことを指す「八十(80)」を冠したものです。『古事記』神代の巻にも、「天の八十平瓮を作りて」とあります。考古遺物も神話に由来する名称が使われていたのです。

土師里の傳承を持つ立部南部には、「緑の一里塚」が建つ日本遺産の竹内街道も走り、歴史の町のたたずまいを見せています。